

ケアセンターけやき

症 例 概 要 利用者氏名：M H 様（90代・男性・要介護2）
利用期間：2016年2月～現在
既往歴：右股関節人工関節置換術後 廃用症候群 前立腺肥大 陳旧性肺じん結核 慢性腎臓病

経過：2016年1月体調不良により約1か月緊急入院。自宅退院後、入院に伴う活動性低下がADL低下を招き、両膝疼痛も重なり、日中はほぼベッド上で過ごされております。リハビリ介入開始時は自信喪失感や筋力低下により外出は困難になり、楽しみもなくなってきておりました。運動療法を行いながら、楽しみを見いだすためにパソコンを導入しました。全く触ったことのない状態から、4年をかけて100ページに及ぶ「自叙伝」を作成できるようになりました。

内 容

Mさんは少年期に足の怪我をきっかけに骨髄炎となり入退院を繰り返して、歩行は両松葉杖を使用しないと歩けない状況でした。1996年頃に右股関節人工関節置換術実施、2017年1月に体調不良による救急入院後はADLが著明に低下してしまい、昼中もほぼベッド上で過ごし、部屋からもほとんど出ない状況です。

介入当初から、ご本人は、「外には出たいけど、膝が痛いからあまり動きたくはない。もう生きていてもしょうがない。死にたい。」など、後ろ向きな発言が多く、また、運動療法も積極的に行えず苦悶しながら時間が過ぎていきました。

数ヶ月後、ご本人との何気ない会話の中で、子供の頃、足を怪我して入退院を繰り返して両松葉杖での生活になったこと、兄弟や隣の人に召集令状がきたときの戦争に向かう方や終戦を迎えた時の事、身体障害者職業訓練所での事、ラジオやテレビ修理の学校を卒業をしながらこれからの人生最後をどう生きていこうかをなど、人生の苦楽を聞いていくうちに、これは何かの形で残したほうが良いと考え、自叙伝の作成を提案させて頂きました。

「字はうまく書けない。」とご本人から訴えがありましたので、「いっそのことパソコンでやってみましょうか?」むずかしいとは思いながらも、提案してさせて頂いたことにご本人も乗り気になり、その後パソコン購入まで至りました。

介入時は両膝疼痛改善の運動療法も行いながら、時折、パソコン使用方法の練習も行い、自主的に練習できるように根気よく行いながら、4年という月日を経て、「自叙伝」完成まで至りました。

4年という月日は経過しましたが、達成感による満足気な笑顔を見せて頂きました。